

授業力を高める

受けの技術

名人・野口芳宏先生にみる授業成功の秘訣

野口芳宏 [監修]

山中伸之 [著]



授業力を高める

受けの技術

野口芳宏 [監修]

山中伸之 [著]



《せいめい》

本書は、授業技術を「攻めの技術」と「受けの技術」に分け、そのうちの「受けの技術」について、授業場面に沿って具体的に述べたものです。

授業技術を「攻めの技術」と「受けの技術」に分けることはあまり行われませんので、その意味では授業技術分析の新しい視点を示したとも言えます。

また、「受けの技術」は、臨機応変の技術で追試の難しい技術でもあります。

ということは、授業の独自性や個性は「受けの技術」によってもたらされている、とも言えます。つまり、授業技術としての「受けの技術」を意識して身に付けることで、授業が円滑に進み、自分らしい授業が行えるようになり、憧れの先生の授業に近づくことができたりするわけです。

さて、そのような「受けの技術」の詳細は本文を読んでいただくとして、少し長くなりますが、「受けの技術」を書くことになったいきさつについて、おつきあいただけるとありがたいと思います。

今から四十四年前に、私は中学校の国語の教師になりました。

教師になったからには、上手い授業ができるようになりたい、とまず思いました。

というのは実はうそで、教師になったばかりの頃は、毎日の業務をこなすのが精一杯で、恥ずかしながら、とても授業とは呼べないような授業をしていました。

上手い授業と下手な授業があるという認識さえしていなかったのですから、授業が上手くなる

はずがありません。

一年目から中学一年生の学級担任も務め、授業は上手いかず、生徒指導もだめで、生徒との人間関係は最悪でした。

そんなふうに数年間を過ごしていたある日、私は書店で『斎藤喜博を追って』という本を見つけました。

斎藤喜博先生は、不勉強な私がかろうじて存じ上げていた、何人かの偉大な教育実践家の一人でしたので、私はその名前にすがって現状を打開しようと考えました。

ところが何としたことか、その本に書かれていたのは斎藤喜博先生の実践ではなく、当時は名前も存じ上げていなかった向山洋一先生の実践でした（一九七九年、昌平社）。

しかし、私はその本に書かれていた向山先生の実践に、脳天を貫かれるほどの衝撃を受けたのです。

そこには、私の実践とはまるで異なる、本物の授業、本物の教育がありました。

その日を境に、私は向山実践と教育技術法則化運動に傾倒していきました。

授業の追試もたくさんしました。

その結果、私は授業が上手くなつたと勘違いをするようになりました。

なぜかという、追試をすれば授業は上手いくものだと思ひ込み、でも実際には上手くないかないことも多かつたのですが、不遜にも、その原因は子どもたちの意欲や知識・技能の未熟さに

あると考え、自分の授業の腕は向上しているはずだと思っていたからです。

内心では自分の授業の拙さに気づきながらも、それを認めることが怖くてできなかったのかも
しれません。

その頃、当時から授業名人と言われていた野口芳宏先生の授業を何度も参観する機会がありました。

先生は、どのような子どもを相手にしても、すばらしい授業をされていました。

授業が上手くないかからないのは子どもに原因があるのだ、などという私の思いは木っ端微塵に打ち
砕かれ、私は自身の授業技術の拙さを思い知ったのです。

私は野口先生の授業にあこがれました。

一歩でも近づきたいと思いました。

野口先生の授業を見、野口先生を講座にお招きし、野口先生の講座に通いました。

そして、時には先生の授業を受けたりもしながら、野口先生の授業の特徴はどこにあるのか、
自分の授業といたい何が違うのかを考え続けました。

ある時、野口先生がこのようなことを述べられました。

「授業で大事なのは『受け』である。さらに、受けた上での『返し』が大事である。」

この言葉を聞いた時、私は「なるほど、これか」と思いました。

野口先生の授業を参観していると、どうしても発問にばかり目がいきますが、野口先生の授業

を特徴づけているのは、この「受け」なのだということに気づきました。

子どもたちの発言を受けて、それを捌いていく技術がとんでもなく高いのです。

こうして私は、「受けの技術」について考えるようになったのです。

本書では、この「受けの技術」を独自に選り出して解説を加えています。

これまで、授業技術としての「受けの技術」を、まとめて述べたものはほとんどありませんので、本書は「受けの技術」の端緒となるものでしょう。

「受けの技術」を、どのような場面でどう使うと効果的なのかは、これからさらに考えていかなければなりません。

本書を手にとってくださった皆さんに、その一翼を担っていただければ幸いです。

山中伸之

序

そもそも授業をなぜ「攻め」と「受け」で考えるのか 11

【1】 授業は計画的に準備されるが偶発的に進行する 12

【2】 授業の上手い先生の秘訣は子どもの発言の受けにある 14

【3】 「受け」があるなら「攻め」もある 15

一

授業を真似ても上手くないのはなぜか 19

【1】 「受けの技術」「攻めの技術」とは 20

【2】 授業には「攻めの技術」と「受けの技術」が必要 22

【3】 「攻めの技術」は真似できる 24

【4】 「受けの技術」は簡単には真似できない 26

【5】 授業の良し悪しに関わる「受けの技術」 28

二

「受けの技術」で授業力が高まるのはなぜか 31

【1】 「受けの技術」は学習課題を明確にする 32

三

「受けの技術」をどのように身に付け、高めるか

43

- 【2】「受けの技術」は子どもの主体性や学習意欲を高める 34
- 【3】「受けの技術」は子どもの思考力を鍛える 36
- 【4】「受けの技術」は子どもの学力を高める 38
- 【5】「受けの技術」は子どもの達成感や満足感を満たす 40
- 【1】「受けの技術」の具体を知る 44
- 【2】授業を見て「受けの技術」の使い方を知る 45
- 【3】「受けの技術」を意識して使ってみる 47

四

「受けの技術」の具体

51

- 1 きつちり受ける 52
 - 【1】板書 52
 - 【2】評価 54
 - ①肯定 54
 - ②否定 56
 - 【3】束ね 58
 - 【4】訂正 59

【5】 説き聞かせ 61

① 学習技能 62

② 学習習慣 63

③ 人生観 65

【6】 机間巡視 67

【7】 傾聴 69

【8】 問・沈黙・注視 71

2 軽く受ける 73

【9】 言い換え 73

【10】 確認 75

【11】 ユーモア 77

【12】 身振り手振り（ジェスチャー） 79

【13】 ○か×かと問う 81

3 ハートで受ける 83

【14】 共感 83

【15】 期待 85

【16】 感想 87

【17】 驚き 89

五

野口芳宏先生の授業に見る、達人の「受けの技術」

105

1 感情を込めて反応する、語る 106

【1】 強弱 大小 緩急 高低 106

【2】 教材文の内容の重要性に応じる 108

【3】 教材文の内容の感情の起伏に応じる 110

【4】 発問、指示、説明、説き聞かせなどの重要性に応じる 111

2 随所で「間」を取る、十分に取る 114

【1】 「間」を恐れない 114

【2】 子どもが理解する時間を取る 116

4 攻めて受ける 93

【18】 黙考 91

【19】 再発問 93

【20】 ゆさぶり 95

【21】 あおり 97

【22】 反問（問い返し） 98

【23】 目標明示 100

【24】 拳手 102

- 【3】 子どもの発言内容を教師が理解したり咀嚼したりする 118
- 【4】 子どもの集中力を高める 120
- 3 束ね・言い換え 122
- 【1】 子どもに、短くずばりと言い直させる 122
- 【2】 子どもの発言を言い換えて伝える 124
- 【3】 教材内容を言い換えて伝える 126
- 【4】 分量の多い内容を束ねて伝える 128
- 4 言語技術、学習習慣、人生観を示す 130
- 【1】 関連する言語技術を解説する 130
- 【2】 関連する学習習慣を解説する 134
- 【3】 関連する人生観を解説する 136
- 5 授業を急がない 138
- 【1】 ゆっくり話す 138
- 【2】 じっくりと吟味する 140
- 【3】 子どもに発言の正誤を問う 142
- 【4】 最後に教師の解を述べる 144

序

そもそも授業を なぜ「攻め」と「受け」で 考えるのか



はじめに、そもそもなぜ授業を「攻め」と「受け」で考えるのかということについて、説明をしておきたいと思います。

授業技術を「攻めの技術」と「受けの技術」に分けることは、一般的ではありません。しかし、この2つの観点から授業技術を考えることによって見えてくるものがあります。

それは、指示・説明や発問以外の、授業力を向上させるために必要な技術だからです。

【1】授業は計画的に準備されるが偶発的に進行する

研究授業には必ず指導案が準備され、授業を担当する教師はその準備に多くの時間と労力をかけています。それほど大がかりではない指導案の場合でも、授業の展開部分は必ず準備されています。

つまり、授業の準備は努めて計画的に行われているということです。

これは、普段の授業でも同様です。

研究授業のように指導案を準備することはなくても、授業の展開をメモしたり、頭の中に思い描いたりして、子どもの前に立っているものです。

ところが、いくら計画的に準備をしたとしても、授業がその計画に沿って進行するとは限りません。むしろ、計画したように進行しない方が多いのではないのでしょうか。

その理由は、教師が計画した通りに子どもたちが反応することは稀なことだからです。子どもたちは、あるときは教師の期待以上の反応を示し、またあるときは逆に期待するような反応を示さなかったりします。それが普通です。

授業は計画的に準備されますが、実際の授業は偶発的に進行するということです。

これは別の見方をすれば、授業には教師が比較的コントロールしやすい部分と、コントロールし難い部分がある、ということを意味しています。

コントロールしやすい部分というのは、例えば次のような部分です。

- ・ 本時の授業で扱う範囲の指示
- ・ 本時の授業での最初の発問

- ・ 教師の計画したタイミングや方法での説明や指示

これに対して、コントロールし難い部分というのは、例えば次のような部分です。

- ・ 指示に対する子どもたちの反応
- ・ 発問に対する子どもたちの解答や解答の分布
- ・ 子どもたちの反応に応じて行う追加の指示や発問

このように、授業には比較的コントロールしやすい部分と、し難い部分とがあるため、教師の行為としては同じ「指示」や「説明」や「発問」であっても、授業の冒頭などで子どもたちの反応を受ける前に行う場合と、子どもたちの反応を受けた後で行う場合とでは、コントロールのしやすさに差が出ます。

この差を考慮せずに、ひとくくりに「指示」や「説明」や「発問」としてしまうのは、授業技術を考える上で不明確な点が生じるのではないかと思います。

そこで、教師がコントロールしやすいかし難いか、という視点を加えて授業技術を考えることで、授業力を高めるために必要な技術がより明確になると考えました。

【2】授業の上手い先生の秘訣は子どもものの発言の受けにある

授業が上手な先生は、子どもたちの発言を受けるのが上手です。子どもたちの発言を受けて、適切な評価をしたり、発言をきっかけに他の子どもたちにあらためて考えさせたり、補足説明をして納得させたりすることができます。

つまり、子どもたちの発言を受け、その発言を生かし、それによって授業をさらに充実させているのです。

授業の良し悪しというと、すぐに発問を思い浮かべがちです。

確かに発問は授業の良し悪しを決める大きな要素のひとつですが、授業の良し悪しは発問だけで決まるわけではありません。

もしも授業の良し悪しが発問で決まるなら、誰にでも良い授業ができます。極端に言えば、教師でなくてもできるでしょう。

なぜなら、発問は事前に考えておくことができますし、自分で考えなくても、記録に残る優れた授業の優れた発問をそのまま使うこともできるからです。

しかし、私にも経験がありますが、優れた授業の優れた発問を真似して授業を行っても、良い授業ができるとは限りません。

理由は、その発問に対する子どもたちの反応が、手本とする授業とは異なっていたり、反応の

分布が異なっていたりして、その後の展開が手本とする授業の通りにいくとは限らないからです。するとどうなるかというと、発問に対する子どもたちの考えを発表させ、それを共有しただけで終わりにしてしまったり、自分なりに子どもたちの発言を生かそうとしても上手くいかず、表面的な授業に終始してしまったりすることになります。

このように、良い授業を行うためには優れた発問があるだけでは足りず、その発問に対する子どもたちの反応を受けて、それを効果的に用いることにより、もっと深い読み取りに導いたり、あらためて考えさせたり、子どもたち同士で話し合わせたりすることが必要になるのです。

ところで、授業の上手い先生の授業を見ると、子どもたちの発言の受け方にも、それらの発言の生かし方にも、いろいろな方法があることに気づきます。

基本的な受け方や生かし方から、やや変則的な受け方や生かし方まで、その先生によって様々な方法が見て取れます。

この発言の受け方や生かし方を「受けの技術」とするならば、良い授業を行うためには、「受けの技術」について考えることが不可欠なことと言えるのではないのでしょうか。

【3】「受け」があるなら「攻め」もある

前項でこう書きました。

ブックデザイン 佐藤 博

授業力を高める「受けの技術」

2024年11月8日 初版発行

監修者 野口芳宏

著者 山中伸之

発行者 横山駿也

発行所 株式会社さくら社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-20 ワカヤギビル5F

TEL: 03-6272-6715 / FAX: 03-6272-6716

<http://www.sakura-sha.jp> 郵便振替 00170-2-361913

© Nobuyuki Yamanaka 2024, Printed in Japan

ISBN978-4-908983-79-5 C0037

*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。